

夏の実践研究会のご案内

「対話型授業」についての提案と各教科等での授業づくりセミナーを行います！

期 日 平成25年8月20日（火）9：00～16：00

内 容 公開授業〔国語（6年，詩を味わおう）〕
〔図画工作（5年，鑑賞の授業）〕

授業研究会（パネルディスカッション）

各教科等の授業づくりセミナー



日 程 8:30 9:00 9:45 10:00 10:45 11:00 12:30 13:30 15:45 16:00

受付 開会行事	公開授業Ⅰ 国語科	休 憩	公開授業Ⅱ 図画工作科	休 憩	公開授業 研究会	昼 食	授業づくり セミナー	閉会 行事
------------	--------------	--------	----------------	--------	-------------	--------	---------------	----------

申し込み 参加費は無料です。（各教科等で実費集金する場合があります。）

別紙案内状を参照の上，ファックス（096-356-2499）にて申し込みください。メールでの受付も行っています。

（yomiya@educ.kumamoto-u.ac.jp）

申し込み〆切 平成25年7月22日（月）

平成25年度研究発表会のご案内

期 日 平成26年2月14日（金） 9：00～

講 師 秋田喜代美先生（東京大学教授）

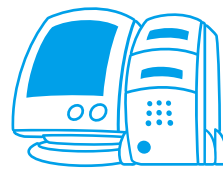
附属小学校ホームページのご紹介

明日の教育を変えていく

● 授業研究最前線

本校教官が綴る実践と研究

● 実践・研究ブログ



ホームページ <http://www.educ.kumamoto-u.ac.jp/~elem/>

熊大附属小 検索



研修会・講師に関するお問い合わせ先

校内研修や研究会の講師として本校教官をお考えの際は，電話か次のアドレスにお問い合わせ下さい。

shiwa@educ.kumamoto-u.ac.jp

（副校長 志波典明）

熊本大学教育学部附属小学校 研究だより VOL.36

発 行 日 平成25年6月7日

編集・発行 熊本大学教育学部附属小学校 〒860-0081 熊本市中央区京町本丁 5-12 TEL 096(356)2492 FAX 096(356)2499

VOL. 36

平成 25年度 熊本大学教育学部附属小学校

附属小 研究だより

～研究テーマ～

豊かな「対話」で広がる創造的な学び(2年次)

熊本大学教育学部附属小学校では、平成21年度から23年度までの3年間、文部科学省委嘱研究校として「論理科カリキュラム開発」に携わってきました。その基盤理論として、トゥルミンの論証モデルを参考にしました。トゥルミン・モデルは、現在、特定の専門知識を持たないで行われる日常的な議論（アーギュメント）の組み立ての中核にある理論です。しかも、国語科教育、社会科教育、科学教育などにおいて、既にこのモデルを取り入れながら、教科の学びが進展しています。しかし、本校の論理科はトゥルミン・モデルを参考にしながらも、さらに発達調査などをもとに、児童の事実即した論理的思考力の解明を行ってきました。昨年度は、この論理科の成果を各教科の言語活動の充実に向けて研究を推進してきました。新学習指導要領では、基礎的・基本的な内容である知識・技能を「活用」するために、言語活動を通して「思考力、判断力、表現力」等を育てることが指摘されています。現在、小・中学校では、こうした言語活動をどのように組織し、どのように対話型授業を実現するかということが大きな課題となっています。私たちは、子どもたちが根拠（客観的な事実・データ）をもとに、自分なりに理由づけ（事実・データの解釈・推論）をして自分の意見を主張し、話し合い、考え合うという言語活動の充実を図ることが対話型授業の実現を図り、思考力・判断力・表現力の育成、さらには応用可能な知識・技能の形成につながると考えています。この三点セットは私たちの授業改革にも有効に機能していくことも確かめられました。昨年の取り組みから明らかとなった課題は以下の通りです。①それぞれの教科において児童が根拠にきちんと向き合う手立ては十分だったのか、その上で、知識・技能育成のための的確な課題が児童自らの問題意識の中から生成されるような工夫が必要である。②こうして生成された課題解決へ向けて、児童が本気で考え合う対話型授業を実現するためには、根拠への着眼と共に、根拠をもとにどのように理由づけすればよいのか、論理的思考力の発達カリキュラムを共有しながら理由づけの質を高めることが重要である。そのために、児童が本気で論理的に思考し、表現し合う手立てや方法をさらに開発していかなければならない。③こうして一時間の学びの中で、児童に獲得させたい知識・技能が応用可能な生きて働く力とするために「振り返り」（メタ認知の育成）をどのように充実させればよいのか評価の問題と共に解明しなければならない。

どの教室にも児童主体の「対話」が豊かに実現できるような学びの実現へ向けて全職員自らが問題意識を持ち、主体的に考え合う授業研究の実現へ向けて日々努力、研鑽を積んでおります。みなさまの忌憚のないご意見をいただきながら、現代の教育課題に応え、多くの学校に寄与できるような実践研究に取り組んでいきたいと思ひます。

熊本大学教育学部附属小学校 校長 河野 順子

豊かな「対話」で広がる 創造的な学び

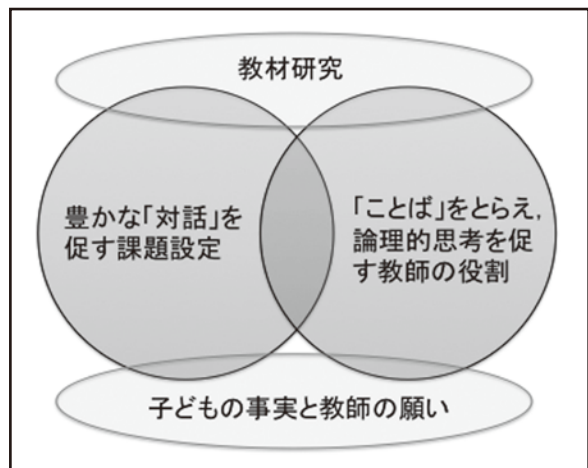


研究部長
井上 伸円

1 わたしたちが目指す授業

わたしたちが授業において目指すものは、教師が子どもに知識・技能を教え授けるものではなく、子どもたちが主体的に主題を探究していく中で、他者との「対話」を通して自己の課題を見出し、思考を練り上げ、新たな知識・技能を獲得していく学びの姿です。

そのために、わたしたちは、目の前の子どもの事実から教師の願いを明確にもつこと、教科の本質に迫るための確かな教材研究を行うことの二つを両輪として授業をデザインしていくことを大切にしています。



2 各教科等に求められる豊かな言語活動

目指す授業を具現化するために、わたしたちは、すべての教科等において言語活動をいかに充実させていくかということを課題の一つに挙げています。

いくつかの取り組みの中で「書く」ことによって、自他の思考の道筋を客観的に言葉で捉えさせる活動も行っています。子どもたちは「書くこと」で「ことば」のつながりを意識し、自分の考えを客観的に振り返ることができます。そして、これまで直感的・断片的だった「ことば」を事実・データなど関係づけながら考えを明確にすることができます。

学習指導要領に明記されているように、言語活動は「各教科等の目標実現のための手立てであることに留意し、教科等の特質を踏まえ」設定されるべきものです。今後、それぞれの教科等において確かな力を子どもたちに獲得させるために、どのような言語活動を設定していくのかを提案していきます。

3 論理的に思考し、表現する子どもを育てる

これからの社会を生きる子どもたちには、知識・技能を自らの判断で活用していく力、行動につなげていく力が求められています。そのためには、「何を根拠に」「どのような理由づけで」「どのような考え」を導いているのかと論理的に思考し表現していく力を、どの教科等でも育てていく必要があります。

授業の中で、活発に意見は交流されるものの話し合いが「空中戦」になってしまい、考えが深まっていけないことがあります。そこで、授業の中では、子どもの発言に対して「どこからそう考えたの?」と「根拠」を問い、そのうえで「なぜ、そう考えたの?」と理由を考えさせることで、自分や相手の思考の道筋を明らかにしていきます。教師が子どもの論理に着目し、「根拠」「理由づけ」「主張」のつながりを子どもたちに意識させることを大切にしているのです。

このことは、子どもたちが対話の中で互いの考えに共通している点や違いに気付き、その妥当性を吟味することや、自分自身の考えの道筋を見直していくこと、さらには互いの思考を練り上げていくきっかけとなっていくます。

本年度も研究発表会をはじめ、夏の実践研究会などで、実践をもとに研究の成果を発信していきます。多くの先生方にご意見をいただければ幸いです。

今回の授業のポイント

①豊かな「対話」を促す課題設定

6年 理科

探ろう,わたしたちの電気 「電気の利用」



井上 竜作

「電気の利用」の学習で、教材として発電ライトを取りあげました。発電ライトの仕組みを調べていくことで、発電や蓄電などの電気の性質や働きについての理解を深めていくことがねらいです。

「うわあ、グリップを押すとあかりがついた!」発電ライトを手にした子どもたちは、夢中にグリップを押して明かりをつけ始めました。その中で「何でグリップを押すと明かりがつくの?」「これどうなっているの?」「中で回っているものは何だろう?」と様々な疑問が出されました。



発電ライト

はくば：グリップを押すと中の何かが回っていたんだけど、明かりがつくから電池かな。

けんた：電池を回してもライトはつかないよ。それがモーターだったらわかる。電気を流すと回るでしょ。

ときお：ライトにモーターは必要ないよ。中の黒くて丸いものが電池なんじゃない。だって電池がないと明かりがつかないでしょ。

このように子どもたちは既有知識やこれまでの体験などをもとに考えていきます。そこで発電ライトを分解させてみると、「なぜ、電池がないのに明かりがつくの?」「どうして、コイルと磁石が回っていたの?」などの新たな問いをもちました。

このように理科の学習では、目の前で起こる様々な事象に対する子どもたちの「なぜ」「どうして」という疑問を大切に課題設定を行っていきます。

4年 体育

1,2キャッチ アタックゲーム 「ネット型ゲーム」



豊田誠一郎

アタックゲームとは、アタックを打ちやすくするために、レシーブのかわりにキャッチを取り入れたソフトバレーボールのことです。

授業では、「コート奥に『ばしっ』としたアタックを打つには、手と足をどのように動かしたらいいだろうか」という課題を提示しました。

子どもたちは二つの動きの違いを根拠として、「手はボールを投げ返すようにするといい」、「足は少し前に出すといい」などと、お互いの考えを交流します。しかし、子どもの言葉をよく聴いてみると「なぜその動きがいいのか」という理由が語られていません。そこで、教師は「なぜそうするといいの?」と問いかけました。

ただし：ボールを投げる時も、足を少し前に出して投げた方が、投げやすくて遠くまで飛ぶから。

ひろこ：まみさんは、投げるようにして、足を前に出してアタックを打っていた。そうしたら速くて「ばしっ」としたアタックがコート奥にいつていたから。

この後、アタックに焦点化した場において、「確かにコート奥に行く」、「『ばしっ』としたアタックになる」などと「足を少し前に出し、投げ返すようにアタックする」動きのよさを理解していきました。このように、語りと試しを繰り返しながら、実感を伴って理解していったのです。

①発電ライトを導入で操作させ、明かりをつける体験をさせたことで、子どもたちは教材のおもしろさや不思議さを感じ、その現象について既知の知識やこれまでの体験から説明し始めました。
②電池がないのに明かりがつくという事象（根拠）を目の当たりにした子どもたちは「なぜ?」「どうして?」という問いをもちます。このような子どもの疑問を大切に課題を設定し、理由づけを検討していきま



①課題を提示した後、左足を前に出し、左手を上げ、右ひじを上げている場面と、そうでない場面の動画と連続写真を提示して比較させました。
②二つの動きの相違点を根拠として、よい動きについて主張していきました。その際、これまでの遊び・運動の経験、本単元での経験から理由づけすることを大切にしました。

